

序

WHOが出した2002年のWorld Health Reportによると、世界の死亡原因の30%が心血管病であり、その基盤に先進国はもちろん、すでに多くの開発途上国においても過栄養とそれに伴う肥満が大きな位置を占めていることが明らかになり、今後の世界の健康対策は肥満にターゲットを当てていくことが示された。

一方、肥満に伴う病態メカニズムの臨床的分析が国内外で精力的になされ、肥満つまり脂肪組織の蓄積の程度が疾患の発症を規定するのではなく、蓄積する脂肪組織の種類、場所が重要な意義を持ち、腹腔内内臓脂肪の蓄積が多様な common disease、つまり動脈硬化を含めた生活習慣病の発症基盤になっていることが明らかになってきた。

さらにその分子メカニズムの解明のための基礎研究も近年急速に進み、脂肪細胞の生物学を対象とした研究（アディポサイエンス）が大きく注目されるようになってきた。その成果の一つとして、脂肪細胞が単なるエネルギー備蓄細胞ではなく、多彩な生理活性物質を活発に分泌しながら全身の臓器、細胞をコントロールしている内分泌細胞であるという概念が確立されたことである。とくに、脂肪細胞から分泌されている生理活性物質（アディポサイトカイン）の分析、アディポネクチンに代表される重要な新規物質の発見はわが国でなされている。

このような時期に日本医学会によって「肥満の科学」というシンポジウムが企画されたのは、タイムリーであり誠に意義深いものである。

本シンポジウムは、1. 肥満のインパクト、2. 肥満のメカニズム、3. 肥満のバイオロジー、4. 肥満治療のサイエンスの4つの項目について、それぞれの分野で国際的レベルの研究を進めている研究者をスピーカーに選び、最新の研究成果を発表していただいた。これらの内容は、日本の生活習慣病の分子レベルでの解明およびその対策に大きく貢献するとともに、わが国で生まれたアディポサイエンスという新しい研究分野が世界をリードするものと期待でき、この企画をしていただいた日本医学会の諸先生に深く感謝するものである。

第124回日本医学会シンポジウム組織委員

松 澤 佑 次
中 尾 一 和
永 井 良 三
門 脇 孝